

カテゴリー性と並列表現の関連性について

著者	馮 元
雑誌名	筑波日本語研究
号	20
ページ	75-91
発行年	2016-02-15
その他のタイトル	Study on the Connection between Categories and Coordinating Expressions
URL	http://hdl.handle.net/2241/00143833

カテゴリー性と並列表現の関連性について

馮 元

キーワード：カテゴリー性、並列表現、「ト・ヤ」、「ヨウ」

要 旨

並列助詞「と」と「や」の意味用法上の違いについては、既に様々な指摘がある。研究者によって異なるが、大きく分けると列挙性の観点から見た分析とカテゴリー性の観点から見た分析という、二つの方向性からの先行研究がある。本論文ではカテゴリー性の観点に立った上で、「よう」との共起関係から、カテゴリー性と並列表現の関連性を明らかにする。

本論文では、「よう」がカテゴリーの指標であることを説明した上で、並列助詞「と」「や」と「よう」の共起率を検証し、「や」と「よう」の共起率が高く、「と」と「よう」の共起率が低いということを明らかにした。これは、「や」がカテゴリー性を持っているため、カテゴリーの指標である「よう」と頻繁に共起しているのだと考えられる。また、並列表現を伴う場合、「よう」の有無により、文の意味が変わるかどうかを検証し、「と」と「や」の違いをさらに分析した。「よう」がない場合、「や」を使う文は変わらず例示の意味が読み取れるのに対し、「と」を使う文は例示の意味が読み取れなくなる。即ち、「よう」に頼らなくても「や」はそれ自体で「カテゴリーの例示」を表し、「カテゴリー性」を持っている一方、「と」は「要素の列挙」を表し、「カテゴリー性」を持っていないと考えられる。

1. 問題の提起

周知の通り、日本語の様々な並列助詞の中で、特に「と」と「や」の違いについて論じた先行研究は数多く存在している。従来の研究については、主に二つの方向性に基づく分析があると整理できる。一つ目は列挙性の観点から考察し、「と」と「や」の語用論的性質をめぐって論じた先行研究である。このような観点からの分

析としては、例えば、「と」が「全部列挙」を表し、「や」が「一部列挙」を表すという寺村(1984)の主張がある。

二つ目はカテゴリー性の観点から考察し、両者の意味論的性質をめぐって論じた先行研究である。このような分析の例として、例えば、「と」が「集合イメージを明示しない、非例示」であるのに対し、「や」は「集合イメージを明示する、例示」であるとする安藤(1995)の主張がある。

安藤(1995)の考えは「集合イメージを明示するか否か、例示か非例示か」という観点から「と」と「や」を区別するものである。即ち、先に「や」が集合イメージを明示し、例示を表すということを確認した上で、「や」のこの性質から「と」を見ると「と」にはそのような性質が認められないため、最終的に「と」は「集合イメージを明示しない、非例示」であるのに対し、「や」は「集合イメージを明示する、例示」という主張をする。

一方、馮(2014)は、「と」と「や」それぞれの性質は何なのかという点に焦点を当てた。「と」で並列された要素にはまとまった結びつきがなく、「と」は要素を列挙するために用いられると考え、馮(2014)では、「と」の本質を要素の列挙と見なした。

「や」で並列された要素は何でもいいというわけではなく、お互いに同じカテゴリーに含まれるという前提が必要であると考え、馮(2014)では、「や」の本質をカテゴリーの例示と述べた。

以上の先行研究をまとめると表1のようになる。

表1 先行研究における「と」と「や」の差異

	と	や
寺村(1984)	全部列挙	一部列挙
安藤(1995)	集合イメージを明示しない、非例示	集合イメージを明示する、例示
馮(2014)	要素の列挙	カテゴリーの例示

主に日本語の「と」「や」と中国語の“和”との対応関係について考察した馮(2014)では、「と」が「要素の列挙」を表し、「や」が「カテゴリーの例示」を表すと述べたが、検証は不十分であった。本論文では、引き続き「と」と「や」の本質を検証・検討していく。しかしながら、今までの先行研究と違い、「と」「や」のみに注目するのではなく、本論文では、両者と「よう」との共起関係から、カテゴリー性と並列表現の関わりを明らかにしたい。

2. 本稿のねらい

並列助詞の「と」「や」と「よう」にははっきりした境界があるように見えるが、実は重なる部分もある。

本稿では、次のような点を明らかにすることがねらいである。

- (ア) 「よう」とカテゴリー性の関わり
- (イ) 「と」「や」の並列と「よう」との関わり
- (ウ) カテゴリー性と並列表現の関わり

3. 「よう」とカテゴリー性の関わり

本論文全体にわたって、「カテゴリー性」という言葉が頻出し、概念が重要となってくるため、ここでまず、「カテゴリー性」という言葉の由来や本論文における位置づけを説明する。カテゴリーの概念としては、漢訳で範疇であり、同種のものが属している「ジャンル」のことである。例えば犬や猫は「動物」というカテゴリーに属し、花や草は「植物」というカテゴリーに属する。カテゴリー性というのはカテゴリーを示すという機能を持つ性質である。「集合」を使う先行研究もあるが、集合というのは多数のものからなる集まりのみであり、それらの多数のものが同じカテゴリーに属しているかどうか分からないため、カテゴリーがより相応しいと思われる。

次に、「よう」とカテゴリー性の関わりについて述べる。例えば、「中国のような国」には、「よう」の前置名詞「中国」は「よう」の後置名詞「国」というカテゴリーに属している。同じく、「太郎のような学生」という表現も、「よう」の後置名詞「学生」がカテゴリーであり、前置名詞「太郎」がそのカテゴリーに属しているメンバーである。

このように、例示情報 A(「よう」の前置名詞)はどのようなカテゴリー B(「よう」の後置名詞)に属するとみなされているのか、例示情報 A を付加されたカテゴリー B はどのようなメンバーを典型として持つのか、「よう」により表されていると思われる。以上のような観察から、「よう」という形式にはカテゴリー性が読み込めるとことが分かる。

4. 「と」「や」の並列と「よう」との関わり

- (1) a. 私はコーラが好きです。
b. 私はコーラのような飲み物が好きです。
c. 私はコーラやファンタが好きです。
d. 私はコーラやファンタのような飲み物が好きです。
e. 私はコーラとファンタが好きです。
?? f. 私はコーラとファンタのような飲み物が好きです。

例文(1a)のような例文は、(1b)の意味にはならない。(1a)において、好きな対象は「コーラ」であるのに対し、(1b)において、好きな対象は「コーラを含むカテゴリー」である。どのようなカテゴリーかというと、コーラと共通の属性を持つ飲み物である。例えば「果汁が入っておらず、炭酸が入り、甘い」などといった特徴を持つ飲み物が挙げられる。

一方、(1c)は(1b)の意味に近いと思われる。(1c)は(1d)の「よう」の省略により産出した文であるが、(1c)においても(1d)においても、好きな対象は「コーラもファンタも含むカテゴリー」である。そのため、「や」を伴う並列要素が2つ以上の場合、「よう」を省略してもよいと思われる。

しかしながら、(1e)「と」を使う場合、好きな対象は「コーラ」と「ファンタ」に限定されてしまい、「両者を含むカテゴリー」ではなくなる。また、無理やり「よう」を加え、好きな対象を「カテゴリー」にすると、(1f)のような例文になるが、文が成立しなくなってしまう。

このような違いを受け、並列助詞「と」と「や」の違いについて、「よう」との共起性から考察し、並列表現と例示表現の関わりを検討してみる。ここで、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」中納言(BCCWJ) (通常版)を使い、並列助詞「や」「と」と「よう」の共起率を明らかにした。検索手段は以下の通りである。

A パターン⇒(A と B) のよう

- (2) 一年生と三年生とでは、まるで子どもとおとなのようにちがってきます。

(石井郁男『中学生の勉強法』)*1

- (3) 水と油のようなふたりなのだとすることを、肝に銘じておかなくては。

(ヴァレリー・パーヴ『まぼろしのプリンス』)

A パターンにおいて、「子どもとおとな」のように、「よう」を用いて例示している構造は「X のよう」である。ただしこの X を構成しているのは A「子ども」と B「おとな」という二つの要素であるため、「A と B のよう」という構造のように見える。実際に表しているのは「A のよう、B のようなもの」ではなく、「A と B/A 対 B」という関係のようなものである。この場合、A と B が一体化している。「子供と大人」以外には、「兄と弟」「先生と学生」「白と黒」などが挙げられる。即ち、A のみあるいは B のみになると文が成立しなくなり、「A のよう、B のよう」という解釈にならない。

「太郎や花子のような学生」の場合、「太郎のような学生、花子のような学生」になってもよいが、「子供と大人のような違い」の場合、「子供のような違い、大人のような違い」にはならない。「太郎や花子のような学生」の場合、「太郎」「花子」が別々に「よう」に係る。「子供と大人のような違い」の場合、「子供と大人」という全体が「よう」に係っていく。

またこの場合に、「と」は要素を並列しているのみで、実際に文章には例示の意味が読み取れたとしても、これは後ろの「よう」から生み出されるものである。

B パターン⇒A と (B のよう)

- (4) だから今、僕の記憶のなかに、かろうじてあるのは、ぼんやりした面影と亡霊のような名前ばかりである。

(レーモン・クノー『オディール』)

*1 下線は筆者、以下同様である。

- (5) このあたりのメイン・ゲームは赤シカの牡、ライオンのようなタテガミと三日月のような角を持つ牡ヒマラヤン・ター、逆J字形の角を持つシャモアだ。
(大藪春彦『小説すばる』)

B パターンにおいては、「ぼんやりした面影と亡霊のような名前」のように、A パターンと同じく、「よう」を用いて例示している構造は実は「X のよう」である。この文においては「亡霊」が X に相当する。ただしこの X の前に名詞が一つあるため、「A と B のよう」という構造のように見える。実際に表しているのは「A のよう、B のようなもの」ではなく、「A」と「X のような B」である。この場合、並列助詞「と」で連結されている A と X の間には何の関係もない。並列要素は A (面影) と B (名前) であるが、B を説明する際、「よう」を用いてより詳しい情報を付加し、「X のような B」となっているわけである。この場合も A パターンと同じく、「A のよう、B のよう」という解釈になれない。

「太郎や花子のような学生」の場合、「太郎のような学生、花子のような学生」になってもよいが、「面影と亡霊のような名前」の場合、「面影のような名前、亡霊のような名前」にはならない。「太郎や花子のような学生」の場合、「太郎」「花子」が別々に「よう」に係る。「面影と亡霊のような名前」の場合、「亡霊」のみが「よう」に係っていく。

この場合にも、「と」は要素を並列しているのみで、実際に文章に例示か比喩の意味が読み取れたとしても、これは後ろの「よう」から生み出されるものである。

C パターン⇒(A) と (B) のよう^{*2}

- (6) たとえば警察部隊と軍隊のような実施機関や、独立行政法人として一般に知られる一連の政府機関が存在する。

(倉島隆『問題発見の政治学』)

- (7) ただ、角田と米田のように新人でなかった池田は、この竣工の日に、霞が関ビルプロジェクトから次のような仕事上の「指針」を引き出している。

(実著者不明『熱さ心、炎のごとく』)

*2 C パターンの全用例を巻末に挙げる。

C パターンにおいては、「(A)と(B)のよう」という構造を持ち、「A のよう、B のよう」という解釈になれる。「警察部隊と軍隊のような実施機関」の場合、「警察部隊のような実施機関、軍隊のような実施機関」になってもよい。「警察部隊」「軍隊」が別々に「よう」に係っている。この場合、例示を表す「や」と同じように見える。

しかしながら、(6)のような表現においては、実施機関として、警察部隊と軍隊以外に何かがないような印象を受ける。つまり、二つしか挙げられない時に「A と B のよう」という形で表現するのではないかと思われる。例えば、ある研究室に、今中国人の留学生が王さんと李さんという二人しかいない場面を設定し、以下の例文を挙げる。

(8) a. うちの研究室には、王さんと李さんのような中国からの留学生がいる。

今研究室にいる中国人留学生は二人しかいない。二つだけであることを示す時に、「や」を使わずに、「と」を使うと考えられる。

またこの時「や」を使うとどうなるのかというと、

b. うちの研究室には、王さんや李さんのような中国からの留学生がいる。

(8b)において、その範囲では「留学生」が全員列挙されているが、「や」で並列していることにより、被修飾名詞が非制限的な解釈となっている。「王さんや李さんのような中国からの留学生」という言い方をする時は、別に王さんや李さんのような特徴を持っている中国人留学生という意味ではなく、非制限的である。一方で、「コーラのような飲み物」と言った時は飲み物の中で、コーラのようなものだけに限定しているわけである。

以下で、A,B,C という 3 つのパターンそれぞれの用例数と比率を図 1 で示した。

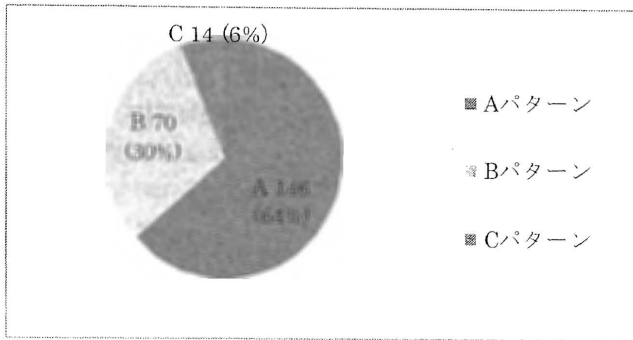


図1 「AとBのよう」におけるパターン別の用例数と比率

さらに、三つのパターンを順番に図式化すると、以下のようになる。

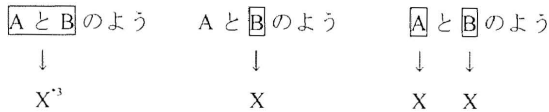


図1を見ると、A,B パターンが94%を占めるのに対し、C パターンはわずか6%しか占められていないことが分かる。また「AとBのよう」という構造を持つ230例を考察したところ、実はAパターンもBパターンも「Xのよう」という構造であることが分かった。この時「と」と「よう」には関係がない。「Xのよう」という構造なら、＜名詞＞＋「のよう」という構造と同じく、例示以外、特に比喻の意味がより優位になるわけである。要するに、名詞一つの「Xのよう」という構造のため、例示よりも比喻の意味が読みやすくなるということである。

ただし、例示と比喻の判定は本論文の考察範囲ではなく、たとえ「よう」が例示を表すとしても、＜名詞＞＋「のよう」という構造のため、「と」が例示を表すとは勿論言えない。

以上の例文分析により、これらの「と」と「よう」が共起している230例の中、「や」と同じく、「(A)と(B)のよう」という構造を持っているのはCパターンの14

*3 Xは「よう」に係る要素を指す。

例のみであることが分かった。従って、「(A)や(B)のようなもの」が 1235 例であるのに対し、「(A)と(B)のようなもの」が 14 例であるというのは明らかに少ないと言えるだろう。

そして、この 14 例の場合には、なぜ「や」を使わずに「と」を使うのかというと、並列要素が二つの場合、この二つだけを明示しようとするときに「と」を使うと考えられる。

しかしながら、このことをもって「と」が例示を表すとは言えない。なぜかというと、あくまでこの文に例示の意味を付与するのは「よう」という例示表現だからである。「と」はただ並列要素を列挙しているのみである。例えば、

- (9) a. そこからみえる内部の自己制約による停滞、内側にめくれこんでゆく感じ、快活さのない精神の曲線、もしかすると安堵と畏れは、外部から視えないドラマのうちもつともこころ惹かれるものだ。
b. (……省略)もしかすると安堵と畏れのようなものは、外部から視えないドラマのうちもつともこころ惹かれるものだ。

(b は吉本隆明『親鸞』)

- (10) a. 富士通 FMV と VAIO が使いやすくて好きなのですが、東芝か N E C のパソコンで同じようなタッチパッドのもの知りませんか？
b. 富士通 FMV と VAIO のような表面がツルツルしていないものが使いやすくて好きなのですが、東芝か N E C のパソコンで同じようなタッチパッドのもの知りませんか？

(b は Yahoo!知恵袋)

この二例を見ると、a と b の意味が違うということが一目瞭然である。明らかに「よう」という例示表現があれば、文全体に例示の意味があるのに対し、「よう」がなければ、ただ要素を列挙していることになる。一方、並列助詞「や」の場合なら、以下の例文 c と d の意味はあまり変わらない。

- (9) c. (……省略)もしかすると安堵や畏れは、外部から視えないドラマのうちもつともこころ惹かれるものだ。
d. (……省略)もしかすると安堵や畏れのようなものは、外部から視えないドラマのうちもつともこころ惹かれるものだ。
(10) c. 富士通 FMV や VAIO が使いやすくて好きなのですが、……

- d. 富士通 FMV や VAIO のような表面がツルツルしていないものが使いやすく好きなのですが……

このように、「よう」を持っている b と d は勿論例示を表すが、注目したいのは「よう」を持っていない a と c の違いである。以上の観察から、「と」が並列要素の列挙を表すのに対し、「や」がカテゴリーの例示を表すという点が分かる。

以上「名詞＋と＋名詞＋のよう」という 230 例の例文を考察したところ、実際に名詞 1 と名詞 2 が例示情報として、カテゴリーを表象しているのはほとんどないということが分かった。

一方、＜名詞＞＋や＋＜名詞＞＋「のよう」という 1235 例の例文を見たところ、ほぼ以下のような例文である。

- (11) たとえばこのパターンの人が映画監督や画家のような芸術家なら、理想を追求し、好奇心と創造力を発揮する…

(芦原睦『心療内科医がすすめる自分に会う心理テスト』)

- (12) しかしポーランド人やイタリア人やチェコスロヴァキア人のような出稼ぎの外国人労働者たちとなると良い扱いはされない……

(フリードリヒ・グラウザー『外人部隊』)

以上の分析から、「と」「や」の並列と「よう」との関わりが明らかになった。「と」も「や」も並列助詞であるが、「や」はカテゴリーの例示を表すため、同じ機能を持っている「よう」との相性がよく、共起率も高い。一方、「と」は要素の列挙を表すため、「よう」との共起率が低い。なお、「と」と「よう」が共起しても様々なパターンがあり、「例示情報 1 と例示情報 2 のようなカテゴリー」という構造(14 例)があるとしても、また「や」と置き換えられる場合があるとしても、「と」は例示の意味を持っているとは言えない。この場合、文全体に例示の意味をもたらすのは「よう」だからである。

5. カテゴリー性と並列表現の関わり

「よう」を用い、「例示情報＋カテゴリー」で一つの事例を説明するのが一般的である。例えば、

- (13) a. パスタやピザのような洋食が好きです。

この例文において、例示情報は「パスタ」と「ピザ」であり、カテゴリーは「洋食」である。ただし実際に、カテゴリーが省略される場合は多くある。それでは、「よう」がない場合に、カテゴリー性があるのか否かについて検討してみる。

光信(2007)において、「N1 のような N2」という構造で、必須要素となっていない「N1 のような」には、(a)N1 がそれに属するタイプの N2 であるという意味で N2 を修飾しながら、(b)属性 N2 をもつものとして N1 を例示する、という双方向のはたらきをとらえることができると指摘されている。また、この場合、文脈の条件や文法的な条件によって、「N1 のような N2」を「N1」に代えても有意義な文であることが損なわれないことが多いと述べ、以下の例文を挙げている。

- (14) もしも伯父のようなかね持ちならば、何百万円かを女に渡して、それで問題を解決することもできるのだ。「もしも伯父ならば……」

(光信(2007) : p.4)

並列要素が二つ以上の場合にも対応すると思われる。

- (15) 矢代君や石井君のような友達がいればそれでいいんです。
「矢代君や石井君がいればそれでいいんです」

(光信(2007) : p.4)

では、(13a)の「よう」が省略された場合にどうなるのかと言うと、以下の例文になる。

- (13) b. パスタやピザが好きです。

このような場合に、例示情報はどのように捕らえられ、いかなる推論が働くのか、またどのようなカテゴリーの表象が形成されているのかについて、答えは一つとは限らなくなる。「洋食」でもよく、「イタリア料理」でもよい。ただし確定できるのは話の焦点になっているのが例示情報の「パスタ」「ピザ」ではなく、両者を包括するカテゴリーだということである。一方、例文 c は違う意味を表す。

(13) c. パスタとピザが好きです。

(13b)において、「や」で繋がる N1 と N2 を例示情報と呼んだのは「や」が例示の意味をもたらすからである。(13c)においては「と」が例示の意味をもたらさないため、例示情報ではなく、並列要素と呼ぶことにする。「と」を使う場合、話の焦点になっているのは並列要素そのものである。

また、以下の例文を見ておきたい。

(16) a. Q: 太郎と花子はまだ来ていない？

A: ふたりは来ましたよ。

b. Q: 太郎や花子はまだ来ていない？

A: ふたりは来ましたけど、……

(16a)の場合、聞いているのは「太郎と花子」という二人が来ているかどうかのことであるため、二人は来ているなら、「二人は来ましたよ」という答えでよい。(16b)の場合、聞いているのは「太郎と花子」という二人ではなく、この二人が属しているカテゴリーのことである。どういうカテゴリーなのかは不明なため、答えもはっきりしない。ただし分かっているのは「太郎と花子」がこのカテゴリーに属しているということである。そのため、「一応この二人は来ていますけど、他はどうなのかはちょっと……」というような答えになる。

もう一例を見ておく。

(17) Q: 今研究室にいるのは誰ですか？

a. A: 太郎と花子と……

?? b. A: 太郎や花子……

この例文において、聞いているのは「誰」であるため、求めている答えは明らかにこの「誰」に属している要素のことである。そのため、「と」を使ったほうがよいと思われる。

次に、カテゴリー性と並列表現の関わりについて論じる。カテゴリーは並列要素の上位概念であり、並列要素はカテゴリーの概念に含まれているため、両者は上下関係にあるといえる。

「や」の並列要素は同種概念である必要があるのに対し、「と」の並列要素は同

種概念であっても異種概念であってもよい。ただし、両者を並べて何かを言おうとする場合、同種の場合は多くみられる。一方、「見ると聞くとは違う」といった文では典型的な両者を並べてそれらの相違点を述べるため、「と」は使えるのに対し、「や」は使えない。よって、「や」を使う並列表現には「カテゴリー性」を伴うのは必須であるのに対し、「と」を使う並列表現には「カテゴリー性」を伴わないと言える。

6. まとめ

本稿では、まず「よう」はカテゴリーの指標であることを説明し、次に、並列助詞「と」「や」と「よう」の共起率を検証し、「や」と「よう」の共起率が遥かに「と」より高いということを明らかにした。これは「や」がカテゴリー性を持っているため、カテゴリーの指標である「よう」と頻繁に共起しているのだと考えられる。

「A と B のよう」の構造を持っている例文は 230 例あったが、「(A)と(B)のよう」という構造、即ち N1 と N2 両方「よう」に係る例文は僅か 14 例しか見られない。他の例文は「(A と B)のよう」という構造か、「A と(B のよう)」という構造である。この二つの構造は実は<名詞>+「のよう」という構造である。また、「(A)と(B)のよう」という構造を持っている 14 例の中で、並列要素が二つの場合、この二つだけを明示しようとするときに「と」を使うという傾向が見られる例文が存在する。こういった要因により、「や」を使わずに「と」を使っていると考えられる。

最後に、並列表現を伴う条件の下で、「よう」の有無によって、文の意味が変わるかどうかという判断により、「と」と「や」の違いをさらに検証した。「よう」が伴う際、「と」であろうと「や」であろうと例示の意味が読み取れるが、「よう」がない場合、「や」を使う文は変わらず例示の意味が読み取れるのに対し、「と」を使う文は例示の意味が読み取れなくなる。即ち、「よう」に頼らなくても「や」はそれ自体で「カテゴリーの例示」を表し、「カテゴリー性」を持っている一方、「と」は「要素の列挙」を表し、「カテゴリー性」を持っていないことが確認された。

7. 今後の課題

日中並列表現の対照研究については、日本語の並列助詞「と」「や」と中国語の

並列接続詞“和”との対応関係を馮(2014)で明らかにした。本稿では日本語の並列助詞「と」「や」と「よう」の関わりを明らかにした。

では、日本語の「よう」と対応する、中国語にはどのような例示表現があるだろうか。また、中国語の並列表現と例示表現にはどのようなかわりがあるだろうか。これらに関しては今後の課題とする。

参考文献

- 安藤淑子(1995)「日本語の名詞及び動詞における並立表現の構造—開いた系と閉じた系—」『広島大学日本語教育学科紀要』5 pp.11-13 広島大学教育学部日本語教育学科編
- 安藤淑子(2001)「中級レベルの作文に見られる並立助詞「や」の問題点—「と」の用法との比較を通じて—」『日本語教育』108 pp.42-50 日本語教育学会編
- 寺村秀夫(1984)「並列的接続とその影の統括命題—モ、シ、シカモの場合—」『日本語学』3-8 pp.67-74 明治書院
- 馮元(2014)「日本語の「と」「や」と中国語の“和”の対応関係に関する一考察」『筑波日本語研究』19pp.28-41 筑波大学大学院博士課程人文社会系日本語学研究室
- 光信仁美(2007)「「N1」のような「N2」の例示用法」『立正大学国語国文』46 pp.1-11 立正大学国語国文学会

コーパスデータ

中納言「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) (通常版)

補足資料 ⇒ Cパターンの全用例

- (1) そこからみえる内部の自己制約による停滞、内側にめくれこんでゆく感じ、快活さのない精神の曲線、もしかすると安堵と畏れのようなものは、外部から視えないドラマのうちもっともこころ惹かれるものだ。

(吉本隆明『親鸞』)

- (2) 富士通 FMV と VAIO のような表面がツルツルしていないものが使いやすくて好きなのですが、東芝かNECのパソコンで同じようなタッチパッドのもの知りませんか？

(Yahoo!知恵袋)

- (3) どこの国でもそうだが、マーケティング史をひもとけば、(1)と(2)のような直接生産者と流通業者とのGをめぐるこうした駆け引きが展開している。

(寺岡寛『スモールビジネスの経営学』)

- (4) 最後に、たとえば警察部隊と軍隊のような実施機関や、独立行政法人として一般に知られる一連の政府機関が存在する。

(倉島隆『問題発見の政治学』)

- (5) しかし、蓮華上に三弁宝珠が載ることは漢訳經典にも説かれており、垂下した右手で瓔珞を摘まむことと数珠を執ることは、七〜八世紀の十一面観音像、例えば韓国慶州石窟庵石造十一面観音菩薩立像と法隆寺木造九面観音菩薩立像のように、同一の手で執ることが可能な手印である。

(朴亨國『仏教芸術』)

- (6) ちょっと考えると、人間の生物エネルギー場バイオフィールドの本体は電場と磁場のように思われる。

(アーヴィン・ラズロー『創造する真空』)

- (7) ただ、角田と米田のように新人でなかった池田は、この竣工の日に、霞が関ビルプロジェクトから次のような仕事上の「指針」を引き出している。

(実著者不明『熱き心、炎のごとく』)

- (8) このような見解と同様に、高橋忠次郎は、婚姻と養子縁組のような創設的身分行為と、離婚および離縁のような解消的身分行為を分けて、身分行為を意思を説明しようとした。

(宮崎幹朗『婚姻成立過程の研究』)

- (9) そもそもこのお話私のツボをつきまくっている訳で剣と魔法と神話のような世界と言うか、世界観もすごく好きだし絵も上手いしねー。

(Yahoo!ブログ)

カテゴリー性と並列表現の関連性について（馮元）

- (10) 基準と制約のようなあらかじめ確立している必要条件に関連してデザインをテストし評価し、必要に応じて改良すること。

（実著者不明『国際競争力を高めるアメリカの教育戦略』）

- (11) ワルシャワのストローブ、ルブリンのグロボクニク、またアウシュヴィッツとトレ布林カの指揮官ヘースとスタングルのように、現場で殺人の指揮にあたったSS隊長でさえなかった。

（イザベル・ヒルトン/ニール・アッシャーソン/M・リンクレイター『第四帝国』）

- (12) いちじく袋とあけび袋のような小さな袋はもともと琴爪入れとして出来たものですが、ハーブなどを入れて飾っても。

（実著者不明『和風布の小物』）

- (13) セガは千九百九十四年に百五十万ドルを投入して五人からなる特別チームを組織し、性別を問わないゲームや、クリスタルのポニー・テールとベビー・ブームのような少女向けのゲームの開発を目指した。

（ダニエル・バースタイン/デヴィット・クライン『デジタル・ウォーズ』）

- (14) ふつうは二十歳、早くて十五歳ぐらいが成人の目安だが、たとえば〈魁〉の王孫と玉公主のように、まだ嬰兒のうちから一人前と見なす場合もないではない。

（井上祐美子『五王戦国志』）

ヒョウ ゲン／人文社会科学研究所
(2015年10月31日受理)